

# 定冠詞に名詞以外の要素が後続する場合の理論的可能性について

土 屋 亮

## Resumen

Este trabajo tiene como objetivo analizar los “usos problemáticos” del artículo definido español y señalar la existencia de varias posiciones teóricas posibles según las que se investiga el estatus sintáctico del mismo que aparece en dichos usos. Con “usos problemáticos” nos referimos a los casos en los que otras unidades lingüísticas que el sustantivo le siguen al artículo, el cual tiende a considerarse como elemento que encabeza un sustantivo o una expresión sustantiva. En la larga historia de filología española siempre ha habido debates sobre la categoría sintáctica a la que pertenece el artículo definido. Unos piensan que el artículo sí que es el artículo, otros piensan que no lo es, sino que es un tipo de pronombre, y hay otras más opciones teóricas. En cuanto al neutro *lo*, unos lo incluyen en el paradigma del artículo definido y discuten el paralelismo entre *el/la* y *lo*, y otros no lo hacen. En este trabajo no se aspira a buscar una teoría definitiva ni se cree que se pueda hacerlo sino que se muestran varias opciones teóricas como estas, especialmente según Bosque (1989), para estudios futuros más detallados de los puntos fuertes y débiles de cada una.

## 1. はじめに

定冠詞や不定冠詞といった冠詞という語類は、名詞あるいは名詞的表現に冠すると理解されている。しかしながら、現実には名詞以外の語類にも付く場合があり、そのような場合における冠詞の統語上のステータスについては論争がおこなわれてきた。英語の定冠詞 *the* ならば、たとえば *the rich* 「裕福な人々」や *the impossible* 「不可能なこと」のように後続要素として形容詞を伴う場合がそうであるし、比較級の *The sooner, the better*. 「早ければ早いほどよい」のように副詞に冠する場合もある。また、スペイン語の場合、形容詞や副詞以外にも、英語の *of* に訳されることの多い前置詞 *de* に導かれる前置詞句、関係代名詞 *que* に導かれる関係節が、冠詞（主に定

冠詞）の後続要素名詞として現れることが可能であり、事情は英語より複雑である。このように冠詞が名詞以外の要素を率いるのは冠詞らしからぬ統語的振る舞いと言ってもよいが、数多くの先行研究において、そのような場合における、冠詞の統語上のステータスについて議論がなされ、本当に冠詞であるのかどうか疑われてきた。本稿では冠詞が名詞以外の要素を率いている用例を確認すると共に、そのような場合におけるスペイン語定冠詞の統語上のステータスを分析する際に選択可能な種々の仮説について、もっぱら Bosque (1989) の研究に基づいて論じる。

## 2. 問題の所在

「はじめに」でふれたように、定冠詞が名詞以外の語類によって後続される時、その統語上の位置づけが問題視される。冠詞は名詞に冠するものという前提があるからである。これは英語やフランス語といった言語でも起こり得るが、スペイン語では一層多くの統語環境において可能性のある現象である。まずは用例を示しつつこれを整理し、どのような統語環境における定冠詞の使用が問題とされるのかを確認する。

### 2.1. 定冠詞に形容詞が後続し名詞句を形成する場合

定冠詞に形容詞句が後続し、その語列が名詞句を形成する場合がある。この場合、文脈上で先行する名詞が省略されている場合と、全くの初出でそもそも名詞が現れていない場合がある。以下の例で、確認する（下線部が該当箇所であり、日本語訳は筆者による）。後で見ると、英語においては、総称表現または抽象的な概念を指す場合を除いて代名詞 *one* を伴う場合が多い。

- (1) El hombre mayor, mientras los otros responden a las preguntas de Claudio Z., lee con detenimiento las páginas del escrito, luego lo dobla, lo mete en el sobre pequeño, éste en el grande y se lo devuelve.

(Alfaya, Javier, *El traidor melancólico*, Alfaguara, Madrid, 1991)

[その年長の男は、他の者たちがクラウドイオX

氏の質問に答える間、書類のページをゆっくりと読み、その後それを半分に折って小さな封筒に入れ、そしてその封筒を大きな封筒に入れて、氏に返す。]

(2) La actuación simultánea de los factores comentados anteriormente hace que dentro de la dehesa exista una gran heterogeneidad de ambientes, formaciones vegetales y recursos utilizables. Así, asociados a los sistemas ladera-vaguada ocurren flujos unidireccionales (a favor de la gravedad) de agua y nutrientes desde las zonas altas a las bajas.

(VV.AA., *Los bosques ibéricos. Una interpretación geobotánica*, Planeta, Madrid, 1998)

[先に述べた要因の同時作用によって、牧草地の中に、自然環境、植生、利用可能な資源の不均質性が生み出される。そして、水と栄養分を含む（重力にしたがった）一方向の流れが、斜面と谷の系に合流し、高い地帯から低いところへ流れる。]

(3) Nada justifica que las científicas deban ser bellas o que exista ningún tipo de discriminación por el aspecto. Sólo si admitimos la teoría de que las poco agraciadas se han lanzado a campos donde la consideración física carece de importancia, podríamos admitir que abundan más las científicas feas que las guapas.

(Giménez Bartlett, Alicia, *La deuda de Eva. Del pecado de ser feas y el deber de ser hermosas*, Lumen, Barcelona, 2002)

[女性科学者が美しくなければならぬとか、容姿による差別が全くない、ということでは決してない。ただ、容姿にあまり恵まれていない女性が、見た目上の評価が重要視されない分野に進出したのだという考え方を受け入れるなら、美人よりもそうでない女性科学者のほうが大勢いるということも受け入れられるだろう。]

(1) の *el grande* は文脈上明らかに「大きな封筒」を意味しているが、その意味を支えているのが直前に現れている *el sobre pequeño* という名詞句である。したがって、*el grande* はここでは *el sobre grande* という解釈になる。(2) や (3) においても同様である。(2) では *las bajas* の直前に現れている *las zonas altas* が意味上の支えとなって、*las bajas* は *las zonas bajas* と解釈することができ、(3) では *las guapas* の直前に *las científicas feas* があることによって *las guapas* は *las científicas guapas* と解釈することができる。さて、先に少しふれたが、同じ現

象であっても英語では代名詞の *one* が用いられることが多いが、「人」を指す場合には具体的な名詞が必要とされる。Losada Durán (1996) からの用例で確認しておこう。なお、問題の箇所は原典ですでにイタリック体になっている。

(4) *Los bajos* no querían estar con *los altos*.

*The short men* didn't like to be with *the tall men*.  
El libro azul y *el rojo*.

The blue book and *the red one*.

¿Son éstos sus trajes? No, esos no son míos; *aquel verde y aquel azul* que están allí.

Is this your suit and dress? No, they are not mine. *That green one* and *that blue one* over there.

(Losada Durán 1996:125)

上に引用した (4) における *los bajos* 「背の低い人たち」と *los altos* 「背の高い人たち」は、初出の段階で名詞を伴わずに特定の (specific) 「人」を意味しているが、英語では名詞 (この場合は *men*) を補う必要がある。多くの研究および基礎的な文法書などによって指摘されていることだが、英語では定冠詞と形容詞のみからなる名詞句は、総称的な解釈のものか、あるいは抽象的な事物を指すものでなければならない。英語においても核となる名詞を伴わず総称的に *the rich* 「金持ちの人たち」と言うことは可能である。このことは、いま引用した Losada Durán (1996) においても “Es obvio que en inglés la nominalización del adjetivo sólo puede ser genérica o abstracta porque, cuando los calificativos se emplean con referencia individual, siempre van acompañados del sustantivo que, en realidad, es el que tiene valor denotativo específico” と述べられている (Losada Durán 1996:118-119)。他方、*el rojo* の例は直前に現れている *El libro azul* によって、*libro* の意味が補完されるが、英語においては代名詞の *one* が必要である。それは、*aquel verde* と *aquel azul* の例においても同様であるが、ただしこの例においては定冠詞の代わりに遠称の指示形容詞が使用されている。

さて、これまでの例は「人」であれ「事物」であれ、具体物を指す名詞句を取り上げた。これらの名詞句はスペイン語においては文法上の性が男性か女性のいずれかであるという特徴を有し、定冠詞および形容詞はそれらが限定する名詞の文法上の性と数に合わせて形態を変える。その一方で、伝統的に中性の定冠詞と呼ばれる *lo* という形態に形容詞が後続することで、抽象的な概念・属性が表現される。

- (5) *Lo importante es saber.* [大事なことは知ることです] (Vergara Fernández 2012:148-149)
- (6) *lo antiguo tiene más valor que lo moderno* [古いものには新しいものよりも価値がある]  
(*Diccionario de bolsillo francés-español/español-francés*, Larousse, Paris, 2001)
- (7) Hay cuatro tipos de hombre: El que dice: “lo que es mío es mío y lo que es tuyo es tuyo”, éste es el tipo normal y hay quienes dicen que éste es el tipo sodomita. “*Lo mío es tuyo y lo tuyo es mío*” es propio del ignorante. “*Lo mío es tuyo y lo tuyo es tuyo*”, es propio del hombre piadoso. “*Lo mío es mío y lo tuyo es mío*”, es propio del malvado. (Abot, Pirque, *Los capítulos de los padres*, Comunidad cristiana Eben-Ezer, 1987) [人間には4種類がある。「私のものは私のもの、あなたのものはあなたのもの」と言う人、これは普通の人であり、これをソドムの種という向きもある。「私のものはあなたのもの、あなたのものは私のもの」というのは、無知な者に見られる。「私のものはあなたのもの、あなたのものはあなたのもの」というのは、信心深い者に見られる。「私のものは私のもの、あなたのものは私のもの」というのは、悪人に見られる]

(5) においては、中性の定冠詞 *lo* に形容詞 *importante* が後続し、(6) においては同じく形容詞の *antiguo* と *moderno* が、(7) においては所有形容詞の強勢形 *mío* や *tuyo* が後続している一方で、先ほどの事例に該当する *el ignorante* 「無知な者」や *el malvado* 「悪人」といった語列も現れている。*lo* を冠するこれらの事例においては、具体的な「人」や「事物」を指示せず、抽象的かつ総称的に、その形容詞が表す属性を持つ事象の総体を指す。ただしその「総体」に「人」は含まれない。なお、この用法は英語においても可能である。比較のために、樋口(2003) から以下の例を見ておこう。

- (8) I suppose we'll just have to wait for *the inevitable*.  
[思うに、僕らは避けようがないことを待つだけになるんじゃないか]
- (9) Imagination allows us to escape *the predictable*.  
[想像力があれば、予見可能なことは避けられる]  
(樋口2003:273)

英語の場合も、この用法では代名詞などを必要とせず、定冠詞 *the* の直後に形容詞が共起可能で、抽象的な意味の名詞句を構成している。

さて、これまでに見た定冠詞と形容詞の語列について

ここで小括しておこう。

- (10) 男性及び女性の定冠詞 + 音形を伴わない既出の名詞 + 形容詞 【*el sobre grande*型】
- (11) 男性及び女性の定冠詞 + 形容詞 (初出で「人」を表す) 【*los bajos · el ignorante*型】
- (12) 中性の定冠詞 *lo* + 形容詞 (抽象的な「概念」を表す) 【*lo importante*型】

(10) のタイプにおいては、既出の名詞が省略されているとも考えられるし (無論これにも異論がある)、教育的にはそのほうが好都合だろうが、(11) と (12) の語列に対してどのようなスタンスを取るかということは、分析者の言語学上の立場が決定的に問われる重要な問題である。名詞句の構造が内心的であるのか外心的か、形容詞そのものが名詞化しているか否か、音形がゼロの名詞を想定するのかしないのか、といった立場上の選択が可能であり、どれか一つを選択肢を採用すると、理論上、他の選択肢がおのずと決まる包摂関係にあるものもある。ひとまずここでは、そのような選択が可能であるということのみを指摘して、形容詞以外の句が定冠詞に後続する事例を以下で確認することにする。

## 2. 2. 定冠詞に前置詞句が後続し名詞句を形成する場合

前の2.1節では定冠詞に名詞以外の語句が後続する例として形容詞の事例を検討したが、本節ではスペイン語の前置詞 *de* によって導かれる前置詞句が後続する事例を確認する。先の形容詞の事例は、名詞以外の語類といえども、スペイン語の母体となったラテン語では語類間相互の転移が容易であったし、名詞という名は、いま我々が名詞という名で理解するものと同等の実質的名詞 (実詞) と、形容的名詞 (形容詞) の上位概念としての名であった。したがって、形容詞に冠する定冠詞はその名の通り定冠詞であると理解されやすい。ところが、定冠詞の直後に前置詞句が後続するとすると、その統語上のステータスが相当に疑われやすくなり、これまで多くの議論がなされてきた。以下のような例がこのパターンに該当する。なお、各々の例文中のイタリック体の部分が問題の定冠詞である。

- (13) En efecto, *el vuelo* de Asturias salió con retraso, pero no perdí el enlace gracias a que *el* de Madrid salió aún más retrasado. (Juan José Millás, *Articuentos*, Alba Editorial, Barcelona, 2001)  
[事実、アストゥリアス[から]の便は遅れて出発したが、マドリードからののはもっと遅れたので乗り継ぐことができた]
- (14) Una tía mía solía entretenerse buscando

teléfonos de conocidos en la guía de Murcia. Claro que *la* de Murcia es más pequeña que *la* de Madrid. (Jorge Martínez Reverte, *Demasiado para Gálvez*, Anagrama, Barcelona, 1989, オリジナルは1979)

[私のお婆の一人は、ムルシア州の電話帳で知っている人の電話番号を探して楽しむのを常としていた。もちろん、ムルシア州の電話帳は、マドリードのものより小さいのだが]

- (15) Los puentes estilo imperio le hacían imaginar allí su casa, más bonita que *la* de Madrid, en la aburrida calle de Ayala. (Javier Momba, *Homenaje a Kid Valencia*, Alfaguara, Madrid, 1989)

[ローマ様式の橋は、そこでいつも彼に自分の家を想像させたのだった。アヤラという退屈な通りにある、マドリードの家よりも素敵なあの家を]

(13) から (15) までの例におけるイタリック体の定冠詞には、先行詞ともいうべき名詞句が存在している。それが下線部の名詞句である。(13) では、先行する *el vuelo de Asturias* の存在が、後続する *el de Madrid* を *el vuelo de Madrid* の意味に解釈することを可能にしている。(14) においても同様である。先行する *la guía de Murcia* によって、後続の *la de Murcia* および *la de Madrid* が、それぞれ *la guía de Murcia* と *la guía de Madrid* の意味で解釈可能になっている。(15) もまた同じである。

さて、以上のような用例を眼前にすると、分析者はどのような分析方法を取るであろうか。先行する名詞と同じ名詞が定冠詞の直後の位置で省略されていると考えるだろうか。つまり、(13) の例で言えば、*el vuelo de Madrid* を想定するであろうか。それも一つの方策であるが、定冠詞の *el* そのものを代名詞とみなすことも一つの方策であろう。特に後者は、統語論上の要請もさることながら、英語やフランス語などと比較する際に得られやすい視点でもある。ここでフランス語の例を一例だけ確認しておけば、フランス語では本件と同じ統語環境において、代名詞とされる *celui(ceux)/celle(s)* が用いられ、定冠詞のみを用いることはできない。

- (16) La croissance réelle de l'économie espagnole dans son ensemble se situe à -1,4 % et *celle* de Madrid à -1,3 %. (<https://ec.europa.eu/eures/main.jsp?lang=fr&acro=lmi&catId=449&countryId=ES&regionId=ES>

3&langChanged=true.)

[スペイン経済の実質経済成長[率]は、全体で-1.4%に位置し、マドリードのそれは-1.3%である]

これまでに見た例のように、先行する名詞が省略されていると考え得る例のほか、男性および女性の定冠詞が初出で「人」を意味する例や、中性の定冠詞 *lo* が現れ、抽象的な「こと・事態」を意味する例もあり、この統語的かつ意味的特徴は形容詞が後続する場合と同様である。

- (17) Este partido desde el principio estuvo muy reñido, defendiéndose muy bien los madrileños contra *los* de Barcelona, que desde el primer momento se observó les llevaban considerable ventaja en facultades físicas y en experiencia del juego. (García Candau, Julián, *Madrid-Barça. Historia de un desamor*, El País-Santillana Madrid, 1996)

[この試合は始めから極めて接戦だった。マドリードの選手たちは、身体能力と試合経験の面で相当有利だと当初から目されていたバルセロナの人[選手] たちに対してよく守った]

- (18) *Lo* de ayer fue impresionante. [昨日のこと [件] は大変よかった] (Vergara Fernández 2012: 148-149)

まず (17) の例においては、問題の *los de Barcelona* という語列の直前に *los madrileños* 「マドリードの選手たち」という語列が現れているが、ここで *los madrileños de Barcelona* という名詞句を想定することは、文脈上当然考えられない。したがって、この例における定冠詞の *los* は初出でありながら、「人」を、しかも文脈から特定される「サッカー選手たち」を意味している。他方、(18) では、中性の定冠詞とされる *lo* が前置詞 *de* によって率いられる前置詞句を従え、上で筆者が訳出したような意味を表す。

さて、(10)、(11)、(12) において形容詞が後続する統語パターンを小括したが、前置詞句が後続する場合においてもほぼ同様の形式でパターンをまとめられる。

- (19) 男性及び女性の定冠詞 + 音形を伴わない既出の名詞 + *de N* 【*el vuelo de Madrid* 型】  
(20) 男性及び女性の定冠詞 + *de N* (初出で「人」を表す) 【*los de Barcelona* 型】  
(21) 中性の定冠詞 *lo* + *de N* (抽象的な「概念」を表す) 【*lo de ayer* 型】

前節で見た形容詞の場合と同じように、定冠詞に前置詞句が後続するこの統語パターンにおいても、やはり問題となるのは、(20) や (21) のように特定の名詞が想定できない統語環境において出現する定冠詞の扱いである。

このパターンにおいても、いくつかの理論的立場を選択することが可能であろう。次節では、定冠詞に*que*関係節が後続するパターンを検討する。

### 2.3. 定冠詞に*que*関係節が後続し名詞句を形成する場合

既に確認した2つの統語パターンに続いて、本節では定冠詞に*que*関係節が後続するパターンを検討することにしよう。定冠詞の後続要素として共起するのが、一語の形容詞であろうと前置詞句であろうと、それが形容詞的な機能を果たしていることに違いはない。その点、この*que*関係節も同様であり、先二つの統語パターンと同じ結論が得られるという見込みが立てられよう。以下の例で確認してみる。

(22) Mi gente es la gente del pueblo, *la que* canta y ríe espontáneamente, *la que* siente sin prejuicios, la sincera. (Vázquez Montalbán, Manuel, Galíndez, 1989, Seix Barral, Barcelona, 1993) [私の民は、田舎の人たちで、屈託なく歌い笑う人たちで、先入観なくものごとを感じ取る人たちで、正直な人たちです]

(23) … el paisaje es eterno y sobrevive en todo caso *al que* lo mira (Llamazares, Julio, *El río del olvido*, 1989, Seix Barral, Barcelona, 1995) [景色はいずれにせよ、それを見る者にとっては永遠であり、残るものである]

(24) No entiendo bien *lo que* pasa. (Vergara Fernández 2012 : 148-149) [何が起きているのかよく分からない]

(25) … de tal modo que a los 6 años lo reconocen el 90 por 100 de los niños, *lo que* muestra el gran impacto que está teniendo la publicidad del tabaco … (Becoña, Elisardo y otros, *Tabaco y salud. Guía de prevención y tratamiento del tabaquismo*, Pirámide, Madrid, 1994) [6歳の子供たちは全体の90%が(タバコのロゴを)認識しており、このことはタバコの広告がもたらしつつある多大な影響を証明している]

(22) においては、下線部の*la gente*を先行詞として、*la que*という語列が後続し、意味的には*la gente que*のように解釈可能である。また、この*la que*が2回現れた後、最後には*la gente sincera*と解釈可能な、定冠詞に形容詞が後続する例も共に現れている。次に、(23)の例では、初出の定冠詞*el* (前置詞の*a*と融合し*al*となっている)

+*que*の語列が「人」を意味している。そして、中性の定冠詞が現れる(24)では、*lo que*という語列で先行詞を含む関係代名詞として機能しており、英語に置き換えるならば関係代名詞の*what*に相当し、これが「人」を意味することはなく常に「事物」や「概念」を表す。また、この*lo que*は先行する文の内容を受ける関係代名詞としても機能し、それを示すのが(25)である。なお、この*lo que*は後続する文中においては主語、直接目的語、主格補語、前置詞の補語として機能し、(25)では後続する動詞*muestra*の主語となっている。

先に見た二節同様、この節においても統語パターンを小括すると、以下のようになろう。

(26) 男性及び女性の定冠詞 + 音形を伴わない既出の名詞 + *que*節 [(22)の例]

(27) 男性及び女性の定冠詞 + *que*節 (初出で「人」を表す) [(23)の例]

(28) 中性の定冠詞*lo* + *que*節 (初出で「事物・概念」を表す) [(24)の例]

(29) 中性の定冠詞*lo* + *que*節 (先行する文を指す) [(25)の例]

やはり問題となるのは、音形を伴わないものの意味の解釈上必要となる名詞の扱いをどうするか、定冠詞が初出で「人」を意味する場合、これは代名詞として考えられるのではないか(あるいは考えるべきなのではないか)、スペイン語には中性の名詞が存在しない以上、名詞が省略されていると考えることのできない中性の定冠詞*lo*を、男性および女性の定冠詞と同列に扱うことができるかどうか、そして、名詞句としての核はどれなのか、などの諸点である。これらの問題について検討するため、次節では、スペイン語におけるカテゴリーの問題について論じたBosque (1989)を取り上げることにする。

### 3. Bosque (1989) による諸概念の検討

Bosqueは統語範疇を論じた単著のうちの一章を、*Artículo y pronombre. Relaciones y diferencias* (『冠詞と代名詞。関係性と相違』)として、我々がこれまでに見たような問題に割り、冠詞と代名詞の関係を論じるのに従来用いられてきた4つの概念、すなわち、現動化(actualizar)、限定(determinar)、指示(referir)、実詞化(sustantivar)をキーワードに論考を進めている。

Bosqueは「現動化actualizar」は、もともとはシャルル＝バイイが定義した語であったが、それが曖昧であったことを指摘し、この語を統語論的かつ意味論的に理解可能なやり方で解釈するならば、その概念は「限定」や「指示」に近づくとし、重要視していない(Bosque 1989 :

180)。元来の定義が、バイイが母語とし分析したフランス語における、冠詞を伴わない名詞をラングに属するものとした上で、それをパロールに移す作用というものであるから、そもそもラングとパロールの関係についての理論的な前提を受け入れる者以外にとっては活用しにくい概念であったということになる。

次に、「限定determinar」であるが、この概念と共に、冠詞と代名詞の関係性について以下のような重要な指摘をしている。

Si comparamos 2) y 3) veremos que la cercanía del artículo y el pronombre es en parte consecuencia del hecho de que «determinar» es una forma de «referir».

[もし2)と3)を比較するならば、冠詞と代名詞の近接性は、部分的には、《限定determinar》が《指示referir》のある一つの形態であるという事実によって来するということが分かる]

Bosque (1989 : 180)

上の引用中における2)と3)は、それぞれ、「限定determinar」と「指示referir」を指している。定の限定詞を伴った名詞句は指示的表現 (expresiones referenciales) であるが、代名詞は指示対象を直に発話の場に「連れ出す」一方で、定の名詞句は統語的、意味的、語用論的な条件を手掛かりにその外延を狭める (つまり、限定する) というやり方で、その指示を発現させる。Bosqueは両概念の近接性を上の引用部で指摘しているが、あえて相違点を取り上げるならば、そのように言えるだろう。いずれにしても、冠詞と代名詞の関係を扱いにくい意味論上の二つの概念の關係に写像し指摘したのは重要である。そして、「限定」という概念の統語論上の問題についても以下のように述べ、論理学者と言語学者の考え方の相違について指摘をしている。

Entre los lógicos el concepto de determinación no es tan básico como el de referencia. Es más, ante sintagmas tan simples como *el libro* no es de extrañar que el lingüista hable de la forma en que *el* especifica a *libro*, mientras que el lógico hable con frecuencia de la forma en que *libro* especifica a *el*. Ello es debido a que en la tradición de la lógica de predicados es frecuente analizar los pronombres personales de las lenguas naturales como variables libres, que estarían categorizadas porque sus rasgos morfológicos las restringen a un cierto tipo de entidades. Por el contrario, los nombres comunes se interpretan en esa tradición como predicados. En dicha concepción resulta

extraño decir que *el* precisa la referencia de *libro* porque *libro* no tiene referencia, desde el momento en el que es un predicado.

[論理学者の間では、限定の概念は、指示の概念ほど単純ではない。さらに言えば、*el libro*のように単純な名詞句を前に、言語学者と論理学者が異なる説明をしてもなんら不思議ではない。すなわち、言語学者は*el*が*libro*を特定化すると言い、論理学者は*libro*が*el*を特定化するとしばしば言うのである。このことは、述語論理の伝統において、自然言語の人称代名詞を自由変数と分析するのが常であることに起因する。そして、この自由変数というのは、その形態論的特徴がそれらのある種の存在物に限定するため範疇化されることになる。反対に、普通名詞はその伝統においては述語として解釈される。この考え方でいえば、*el*が*libro*の指示を明確にするという言い方は奇妙なものになる。というのも、*libro*が一つの述語である時点から、これは指示を持たないからである。]

Bosque (1989 : 182-183)

Bosqueが示す論理学者と言語学者の考え方の相違の問題は即座に、名詞句における核はどこにあるのかという統語論上の問題を想起させる。構造主義言語学者ならば、名詞句である*el libro*の核は名詞でなければならず、それは*libro*であると言うであろうが、同じ言語学者でもBosqueのような生成文法論者は論理学者の立場に与するであろう。そして、実際、この考え方でスペイン語名詞句の統語現象を説明しており、自身の研究であるBosque y Moreno (1988)<sup>1)</sup>についてこう述べている。

En el análisis del neutro *lo* que proponemos en Bosque y Moreno (1988) se acude a esa idea para mostrar que el adjetivo *bueno* en *lo bueno* representa el elemento que restringe el rango de la variable que corresponde a *lo*, núcleo del sintagma, y para sugerir incluso que el papel del sustantivo en los sintagmas definidos no neutros puede ser el de restringir el rango de la variable que el artículo definido representa. [我々がBosque y Moreno (1988)で提案する中性の*lo*の分析において、その考え方をういて、*lo bueno*における形容詞*bueno*が、その句の核である*lo*に対応する変数のランクを制限する要素を表すことを証明しようとした。そして、中性ではない定の名詞句における名詞の役割は、定冠詞が表す変数のランクを制限することであろうということさえをも、示唆したのであった]

Bosque (1989 : 183)

彼によれば、伝統的には中性の定冠詞とされる *lo* と形容詞 *bueno* からなる語列 *lo bueno* において、*lo* が核であって、中性ではない名詞句においても同様であるらしい。スペイン王立アカデミー (RAE) を筆頭に、この *lo* を定冠詞と見る向きもあるが、その際、スペイン語には中性の名詞が存在しないという問題を処理する必要に迫られる。つまり、[*lo*  $\emptyset$  *bueno*] という構造を想定し、 $\emptyset$  が何であるかを示さなければならない。その点、本稿の (5) と同じ統語パターンである *lo bueno* の核を *lo* としておくのは、理論上の利点がある。

そして、Bosque が最後に取り上げているのが、「実詞化」である。重要なのは2点あるとし、そのうちの1つはある特性を表す形容詞が通時的に語彙化していく過程と、もう一つは、統語的にある範疇のものが転移を起こすという現象であるとしている。ここにおいて、Tesnière の名前や、それをスペイン語に応用した Alarcos らの名前が挙げられているが、本稿で我々が見たような事例について、“Desde este punto de vista, el papel del artículo en sintagmas como *el caro* o *el de Pedro* sería convertir a *caro* y *de Pedro* en sustantivos. [この観点に立てば、*el caro* (その値段の高いもの) や *el de Pedro* (ペドロのそれ) のような名詞句における定冠詞の役割は、*caro* や *de Pedro* を実詞に変換することであろう] Bosque (1989 : 184)” と述べている。このように述べた後で Bosque は、この「実詞化」に反対する者の意見をいくつか提示し、次のように締めくくっている。

En el apartado siguiente comentamos algunas opciones que se ofrecen, pero en éste quisiéramos indicar que la hipótesis sustantivadora parece mezclar o confundir «sustantivar» con «determinar»; es decir, «cambiar la categoría gramatical» con «precisar la referencia de una expresión definida». [次節では提示されるいくつかの選択肢について論じるが、そこでは実詞化説が「実詞化」と「限定」、すなわち「文法上の範疇を変換すること」と「定の表現の指示を明確にすること」を混せてしまっているか、取り違えているということを示したい]

Bosque (1989 : 186)

以上のように、Bosque は本稿の (10) や (19) のような統語パターンにおいて (そしておそらくは (26) の場合も)、定冠詞が後続する要素を実詞化すると考える説をほぼ棄却している。そして、上の引用中における「次節」で提示される選択肢こそ、我々が興味を持つものである。この理論上の選択肢については、節を改めて、次節で検

討することにする。

#### 4. Bosque (1989) が示す理論上の選択肢

本稿の第2節で見たような、全体としては名詞句であるものの名詞が現れない統語パターンをどのように分析するかという点について、前節で述べたように、Bosque はいくつかの理論上の選択肢を示している。本節ではそれを取り上げよう。

まずは、先にも登場した *el libro* のように極めて単純な名詞句における統語構造として、Bosque は以下の3つを提示する。

En sintagmas tan sencillos como el libro tendríamos que optar esencialmente entre a) , b) o c) :

- a) El núcleo de *el libro* es el sustantivo *libro*
- b) El núcleo de *el libro* es el artículo *el*
- c) El núcleo de *el libro* es el pronombre *él* en una de sus formas

[*el libro* のように単純な名詞句においても我々は a)、b)、c) の中からいずれかを選択しなければならないだろう。

- a) *el libro* の核は名詞の *libro* である
- b) *el libro* の核は冠詞の *el* である
- c) *el libro* の核は (人称) 代名詞 *él* の一つの形態である]

Bosque (1989 : 186-187)

そして、この引用部の直後で、本稿で取り上げている冠詞に名詞が後続しない場合についての選択肢も示している。

A estas tres opciones corresponden otras tres en los casos en que el artículo precede a una categoría léxica no nominal, como un sintagma adjetival o preposicional, o bien una oración de relativo. Esquemáticamente:

- a') El núcleo de *el de Pedro* es una categoría nominal nula o tácita
- b') El núcleo de *el de Pedro* es el artículo *el*
- c') El núcleo de *el de Pedro* es el pronombre *él* en una de sus formas

[先の3つの選択肢に対して、形容詞句や前置詞句、関係節のような名詞的ではない語彙範疇に冠詞が先行する場合の、もう3つの選択肢が対応する。おおよそ次のようになる。

- a') *el de Pedro* の核は、ゼロの、あるいは音形を伴わない名詞的範疇である

- b') *el de Pedro*の核は冠詞の*el*である  
c') *el de Pedro*の核は(人称)代名詞*él*の一つの形態である]

Bosque (1989 : 187)

先にBosqueが指摘したように、論理学者ならばb)およびb')の選択肢を選ぶであろうが、一つの選択肢を選ぶのが目的ではなく、読者にそれぞれの選択肢を比較してもらうのが目的であると述べている(Bosque 1989:186)。さて、これらのそれぞれの選択肢について、Bosqueはさらに以下のように述べており、問題の整理がしやすい。

Debe señalarse que, en el caso de la tercera opción, los autores que defienden c') no se muestran tan explícitos respecto de c). Bello sí parece serlo en algunos párrafos... [略]

[指摘しなければならないことは、三つめの選択肢の場合、c')を主張する者たちが、c)について態度をそれほど明確にはしていないことである。Belloはいくつかの段落でそう主張しているように見えるが・・・]

Las opciones a) y a') tienen más defensores. Entre ellos están Alonso y Ureña (1938), Lázaro (1975) ..., y por lo que respecta específicamente a a'), el mismo Bello en otros párrafos de su gramática... [略]

[a)とa')の両選択肢は、より擁護者が多く、その中にはAlonso y Ureña (1938)やLázaro (1975)・・・らがいるが、とりわけa')に関して言えば、自らの文法書の他の段落でBello自身もおり・・・]

Bosque (1989 : 187)

引用中のBelloというのは、ベネズエラの文人Andrés Bello (1781-1865)を指す。彼は一生を通じての言語学者ではなかったが、1847年に*Gramática de la lengua castellana destinada al uso de los americanos* (『アメリカ人の使用のためのカスティーリャ語文法』)を出版したことで、スペイン言語学の歴史にその名を残した。そのBelloは上述の文法書においてc)とc')を双方とも明確に主張しているように見えるという。Belloの冠詞観は筆者が別の稿で論じたが、スペイン語の定冠詞と三人称の主格人称代名詞を同一の言語単位の異形態とみなし、前者をその弱勢形、後者をその強勢形としている(土屋: 2015)。そもそもc)の選択肢はこのBelloの考え方を前提にしていなければ、出てきにくい視点である。さて、そのBelloも自身の文法書内の他の箇所、c)とc')の考え方を採用しているにもかかわらず、a')を主張して

いる箇所があるという。英語やフランス語などから見れば奇異にも見える定冠詞が前置詞句に先行するという統語パターンは、そこに省略されている何らかの名詞が存するとする考え方(すなわちa'))に、c')を採用しているBelloをも誘導するほど特徴的なパターンと言えるのではなかろうか。さて、先の引用ではb)およびb')についてふれられていないが、Bosqueはこの次の箇所でするように述べている。

En cuanto a la opción b) - b'), es de notar que no está suficientemente diferenciada en algunos autores respecto de c) - c'). [略] Recuérdese que aceptar el principio de endocentricidad supone admitir que el núcleo es el elemento que da nombre a la categoría formada, que se considera así como una expansión suya. Consecuentemente, el concepto de «sintagma nominal» (SN) solo es apropiado, en sentido estricto, en los análisis «a». De acuerdo con el principio citado, en los análisis «c» debe hablarse de «sintagma pronominal» (SPRON) y en los análisis «b», de «sintagma determinante» (SDET). Así pues, desde la opción b') *el libro de Pedro* es un SDET, mientras que *libro de Pedro* es un SN.

[b)およびb')の選択肢については、指摘すべきことがある。それは、幾人かの研究者においてはc)およびc')と十分な差別化が図られていないということだ。思い起こしていただきたい。内心性の原理を採用することは、構成される範疇に名前を与えている要素が核であると認めることである。したがって、厳密に言えば、「名詞句」という概念は「a」の分析でのみ相応しく、「c」であるならば「代名詞句」と言うべきであるし、「b」なら「限定詞句」となる。ゆえに、b')の観点からは、*el libro de Pedro*は限定詞句(SDET)であり、一方*libro de Pedro*は名詞句である]

Bosque (1989 : 187)

この引用中で述べられているとおり、「a」(a)およびa')双方の考え方を採用すると、それは内心性を受け入れることを意味し、その逆も然りである。そしてそれは、*el libro*の場合にはそれでよしとしても、*el de Pedro*の場合は核となる語の省略を想定することになる。これを採用する場合にすぐ問題となるのは、先に見た(20)の例のように、初出でありながら「人」を表す事例では復元すべき名詞が、少なくとも文脈にはないということと、(21)のように中性の定冠詞とされる*lo*が共起する場合、音形ゼロで、中性の名詞相当表現を仮定しなければならなくなること、そして*en su casa*のような前置詞句をは



はじめとする外心構造の句 (sintagma) との整合性の問題である。また、これは定冠詞に *que* 節が後続するパターンにおいても全く同様のことが言えよう。 *en su casa* という句の機能は、 *en*、 *su*、 *casa* のいずれの機能とも異なり、文中においては副詞的か形容詞的に機能する。生成文法家は、皆が皆見解を統一させている訳では当然ないが、*«b»* を選ぶことによって、全ての句の核は句の先頭に来るものとして扱う。そうすれば、少なくとも英語やスペイン語のような言語においては、全ての句が内心構造となり、一貫性が保てる上、より簡潔であって、彼らには都合がよい。

さて、先の引用中、Bosqueは*«b»*と*«c»*があまり区別されないことがある点を指摘していた。この*«b»*と*«c»*の差異について述べている箇所があるので、これを下に引用しよう。

La diferencia más importante entre «b» y «c» está en que en esta última se propone una relación predicativa entre artículo y sustantivo. Es decir, desde «c» la relación sintáctica entre *el* y *libro* en *el libro* sería parecida a la que existe entre *éste* y *de Pepe* en *éste de Pepe*.

[*«b»*と*«c»*の間の最も重要な差異は、後者は冠詞と実詞の間に叙述関係を想定していることである。つまり、*«c»*の立場からは、*el libro*における*el*と*libro*の間の統語関係は、*éste de Pepe*における*éste*と*de Pepe*の間に関係と相似しているだろう]

Bosque (1989 : 189)

ここに引用した内容は、つまるところ、*«c»*の観方においては、*el libro* (その本) は「それは本である」という関係を基礎にし、*éste de Pepe* (ペペのこれ) は「これはペペのである」という関係を基礎にしているということになる。

以上、Bosqueが提示した3つの可能性を考えると、彼はこれら3つの間に接地点があるだろうとしているが (Bosque 1989 : 191)、いずれにしても多くの潜在的な理論上の選択肢を前に、分析者は自らの立場を決めていくことが求められよう。*el libro*のように単純な語列も、名詞句と呼ぶのか限定詞句と呼ぶのかで既に観方は異なっており、*el*が*libro*を限定するのか、*libro*が*el*を限定するのか、あるいは*el*と*libro*には叙述関係があるのかということについても、自らの分析上の立ち位置を決める必要がある。そうでなければ精緻な分析はできないであろう。

## 5. 結論に代えて

本稿ではこれまでに、定冠詞に名詞以外の要素が後続するパターンの事例を確認し、その解釈の種類についてまとめた。その後、Bosque (1989) を取り上げ、語列全体としては「名詞句」となる句の分析方法の3つの可能性について検討した。生成文法のような特定の理論の上で現象を分析する際には、分析者が頭を悩まさなくとも、ほぼ自動的に確立してしまう観方が存在しようが、そうでなければ、あらゆる選択可能性について考慮し、その有効性を測る必要がある。スペイン語は、英語と比べても、名詞以外の要素に定冠詞が先行する事例が多い。そのような場合における当該の句の構造について、より多くの現象を検討しながら、本稿で確認した理論上の選択肢について引き続き考えていかなければならない。

## 註

- 1) Bosque (1989) 内では、Bosque y Moreno (1988) として登場するが、実際に出版されたのは1990年である。

## 参考文献

- Bosque, Ignacio (1989) *Las categorías gramaticales*, Síntesis, Madrid.
- Bosque, Ignacio y Juan Carlos Moreno (1990) «Las construcciones con *lo* y la denotación del neutro», *Lingüística (Revista de ALFAL)* 2 (1), pp. 5-50.
- 樋口昌幸 (2003) 『[例解] 現代英語冠詞辞典』大修館書店、東京。
- Losada Durán, José Ramón (1996) “La nominalización del adjetivo en español e inglés, el número y la referencia”, *RESLA (Revista Española de Lingüística Aplicada)*, Vol. 11, pp.117-127.
- 拙稿 (2015) 「Andrés Bello (1847) の冠詞の扱いについての疑義」、『福岡大学人文論叢』第47巻第2号、pp.631-657、福岡大学。
- 辞典および使用コーパス  
Real Academia Española, *Corpus de Referencia del Español Actual* (<http://corpus.rae.es/creanet.html>) [最終閲覧日2015年3月17日]  
*Dictionnaire de poche[Diccionario de bolsillo] français-espagnol/espagnol-francés*, Larousse, Paris, 2001